

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：32415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04640

研究課題名(和文) 地域と伴走して教育文化運動へつないだ戦後移動図書館活動の実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study of Mobile Library Connecting Movement for Cultural and Community in Postwar JAPAN

研究代表者

石川 敬史 (ISHIKAWA, Takashi)

十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：90634270

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：戦後日本の移動図書館の成立を実証的に考察すると、戦前・戦中期に持続し拡充を重ねた貸出文庫・巡回文庫の存在を基盤としながら、自動車という近代的装置を用いて、図書の配本を介しながら、図書館と地方(地域)とを結びつけることにより、読書環境の整備や図書館の設置、さらには読書会や座談会などの開催など地方文化の振興を果たす目的があった。戦後初期における日本の移動図書館とは、単に図書を運搬する装置ではなく、移動図書館の活動方法や自動車への装備等に、当時の図書館が目指す理念を体現していたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、公立図書館による移動図書館の台数が減少し、活動が固定化・定型化する傾向の中で、戦後初期における「移動する図書館活動」には、見つめ直すべき図書館運営の源流や、地域とともに歩む図書館活動の本質が隠されていた。すなわち、地域に寄り添う移動図書館を図書館サービス計画全体の中でどのように位置づけていくか、という図書館活動の可能性が、戦後初期におけるさまざまな図書館による移動図書館活動に内包されていた。

研究成果の概要(英文)：Mobile library of Post-war Japan were started by prefectural libraries in the late 1940s. Mobile library toured around rural villages using automobiles, which were modern machines at the time, delivering culture and creating a place for residents to gather. Based on the existence of collection for loan to groups and traveling library from Pre-war through wartime. It was found that the Japanese mobile library in the early Post-war was not the vehicles transported books, but embodied the ideas at that time aimed, such as the way the mobile library works and the equipment on vehicles.

研究分野：図書館学

キーワード：移動図書館 自動車文庫 自動車図書館 図書館史 移動公民館 貸出文庫 巡回文庫

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究における開始当初(申請時)の学術な背景や問題意識は次の通りである。

図書の入手が困難な戦後初期(1940-50年代)において、移動図書館車がひとつひとつの地域を巡回し、文化の灯として地域に与えた影響は大きかった。移動図書館の活動は、単に図書を運ぶのではなく、地域に図書館活動が飛び出し、数多くの地域住民と図書館員とが対話する場を形成した。

戦後初期の移動図書館においては、「館(やかた)」とは異なる利用者層(例えば、農山漁村の若い女性等)が移動図書館に集い、映画会や演芸会などの「文化の場」が形成された。同時に、移動図書館活動は図書館としての活動をはるかに越え、地域の文化活動や青年を主体とする活動として位置されていた。この当時の移動図書館は、図書館の理念を地域に運び、戦前期の閉塞した環境からの解放と社会変革の主体を形成するメッセージ性を有していた。

こうした戦後日本の移動図書館は、1948年7月に巡回を開始した高知県立図書館「自動車文庫」の巡回が最も早いといわれている。しかし、1949年9月に開始した千葉県立図書館「訪問図書館ひかり」の活動は全国各地に影響を及ぼした。しかし、1960年代前半になると、都道府県立図書館による移動図書館は団体貸出が中心となったため、批判的に論じられるようになった。移動図書館の再評価には、1965年9月に東京都・日野市立図書館が開始した移動図書館「ひまわり号」を待たなければならなかった。「ひまわり号」は、貸出の重視、全域へのサービス、資料が第一という方針のもと、戦後の公共図書館活動を大きく変革した。

しかし、これまでの調査・分析は、図書館による移動図書館活動を対象としたため、結果的に、広大な行政域を対象に都道府県立図書館が実施する自動車の移動図書館に限定されていた。そこで、本研究では、制度・行政的な「図書館」の枠組みに留まらず、「地域に図書館が移動する」という視点に立脚し、移動公民館など広範な「移動する図書館活動」を対象とする。そして、これらの特質を実証的に分析したうえで、手段に留まらない移動図書館活動の定義の再構築と、読書運動等の教育文化運動との連続性を解明する。

2. 研究の目的

本研究では、戦後初期(1940-50年代)における「移動する図書館活動」を対象とする。具体的には、都道府県立図書館の移動図書館に留まらず、図書館としての活動が内在していた都道府県の社会教育課による移動公民館の活動や、地域の子どもを対象とした移動児童館の活動、移動博物館の活動などに焦点を当てる。本研究では、これらの活動を対象として、以下の点を明らかにすることを目的とする。

第一に、地域に移動した理念と目的である。図書館活動が内在したさまざまな移動する活動(移動公民館や移動児童館等)の成立背景を分析し、地域に移動した理念と目的を実証的に明らかにする。そのためには、具体的な活動内容(利用者層、巡回ルート、積載図書、担当者の想い等)を分析し、戦前期からの貸出文庫・巡回文庫との連続性ととともに、建物における活動との相違点を考察する。

第二に、地域社会の受容と主体形成である。行政(都道府県・市区町村)が行う移動する諸活動が、青年団や婦人会など地域の活動や住民生活の中にどのように受け入れられたのかを明らかにする。特に、これらの活動を地域住民がどのように支え、どのように地域住民の主体形成に結びつけたのかを考察する。

第三に、地域活動の位置と連続性である。図書館の枠を越えた「移動する図書館活動」が地域に何をもたらし、どのような地域活動に連続したのかを解明する。例えば、読書運動など、家庭教育の関わりから、地域文庫運動や農業改良普及事業、農村青少年教育などとの位置と意義を分析できる。

これらの分析と考察を通して、行政による官製的な図書館活動(サービス)や効率的な配本網・図書館網の確立とは異なる「移動する図書館活動」の定義の再構築と、地域社会に図書館活動が移動する意義と役割を解明する。

3. 研究の方法

本研究の方法は、以下の通りに整理できる。とりわけ、戦後初期の移動図書館活動を実証的に考察するために、公立図書館、大学図書館、文書館等に所蔵されている一次資料を積極的に収集するとともに、当時の図書については古書店からも購入した。

(1) 公立図書館が実施主体ではなく、図書館活動を内包している「移動する図書館活動」の理念と目的を明らかにするため、以下の方法で調査した。

1950年12月に巡回を開始した富山県教育委員会社会教育課による移動公民館「みずほ」の巡回開始の経緯、活動内容、巡回ルート、さらには図書館の設置や公民館の設置等、県内に及ぼした影響(富山県は図書館・公民館の設置率が高い)を調査した。富山県立図書館、富山県公文書館、国立国会図書館、日本図書館協会資料室において資料調査・収集を実施した。

1951年7月に巡回を開始した兵庫県教育委員会社会教育課による移動公民館は、更新を含め、11台もの自動車が県内各地を走っていた。他方で県立図書館の設立が他の都道府県と比べて最も遅かったという特徴を有している。そこで兵庫県において、移動公民館の巡回を開始した経緯や活動内容、巡回の目的を調査した。兵庫県立図書館、神戸市立中央図書館、あかし市民図書館、兵庫県議会図書室、兵庫県公館県政資料館、国立国会図書館、日本図書館協会資料室において資料調査・収集を実施した。

- (2) 1949年9月に巡回を開始した千葉県立図書館「訪問図書館ひかり」以前の移動図書館活動を実証的に明らかにすること、「移動図書館」や「自動車文庫」等の用語の使われ方・定義の種類と変遷について検討するため、以下の通り調査した。

国内初の移動図書館(自動車文庫)と指摘されている1948年7月に巡回を開始した高知県立図書館の「自動車文庫」について、本研究申請以前に収集した一次資料を基盤としつつ、さらに国立国会図書館や日本図書館協会資料室において資料調査・収集を重ねた。

1949年3月に移動図書館(巡回文庫型)を開始した鹿児島県立図書館の移動図書館について、本研究申請以前に収集した一次資料を基盤としつつ、さらに国立国会図書館や日本図書館協会資料室において資料調査・収集を重ねた。

1948年8月に岩手県立図書館が「移動図書館」を実施したと同館の資料等に記述されていた。そこで、同館の「移動図書館」の具体的な活動内容や開始の背景を明らかにするため、岩手県立図書館、国立国会図書館、日本図書館協会資料室において資料調査・収集を実施した。

戦後初期における日本国内の移動図書館の成立を幅広く検討するため、現在の「移動図書館」を意味する活動名称(用語)の種類と変遷、使用方法を明らかにするため、図書館統計における移動図書館に該当する調査項目や、辞典・用語集における採録用語を精査し考察した。

- (3) 戦後初期の移動図書館は、都道府県が実施していたため、結果的にこの当時の移動図書館調査は、都道府県立図書館による広域的な移動図書館活動と、同館が巡回する農山村部が対象となっていた。加えて、移動図書館活動を担う主体(行政側)の資料に基づく傾向にあった。したがって、個々の地域の特徴において移動図書館がどのように受容され、どのようにしてさまざまな地域活動に結びついたのかを十分に検討することができなかった。そこで、戦後都市公民館発祥の地であり、都市として拡大・発展した八幡市(現・北九州市)を対象に、八幡市立図書館の「自動車文庫」、八幡製鉄所図書館の「自動車文庫」、八幡市民生部児童課の移動児童館車という3台の活動の経緯や活動内容、利用状況、特徴等を実証的に考察した。北九州市立中央図書館、北九州市立八幡図書館、北九州市文書館、九州国際大学図書館、福岡県立図書館、法政大学多摩図書館、大原社会問題研究所資料室、国立国会図書館、日本図書館協会資料室において資料調査・収集を実施した。

- (4) こうした戦後初期における移動図書館の活動、「移動する図書館活動」の分析を踏まえながら、現在の公立図書館による移動図書館活動の展望や、移動博物館等の移動する活動についての考察も重ねた。

4. 研究成果

本研究では、広範な「移動する図書館活動」を対象とし、地域における教育文化運動との連続性を実証的に解明することを目的とした。各地の図書館や文書館等において一次資料を中心に資料調査・収集と資料の読み込みを重ねた。その結果、本研究の成果は以下のように整理することができる。

- (1) 戦後初期において図書館活動を内包している「移動する図書館活動」について実証的に調査した結果、以下の点が明らかになった。

1950年12月に巡回を開始した富山県教育委員会社会教育課による移動公民館「みずほ」、さらに翌年に巡回を開始した「ありそ」「あかつき」(1951年7月)を対象に、当時の移動図書館の性格を実証的に考察した。その結果、第一に、当初は移動図書館としての活動を目指していたが、ナトコ映写機の巡回と同県内における公民館の積極的な普及(指導)を背景に、公民館機能と図書館機能を併せ持ちながらも、巡回を重ねるうちに公民館の性格が強調され、重視されたことが明らかになった。第二に、このように成立した富山県の移動公民館であったため、県内の図書館ネットワークを形成し、読書活動を広げる手段として移動公民館が機能しなかった。移動公民館の位置づけが不明瞭となり、とりわけ図書館関係者から移動公民館に対して批判的に言及されるようになり、結果的に移動公民館が移動図書館として、県立図書館へ移管されることとなった。

1951年8月に巡回を開始した兵庫県教育委員会社会教育課の移動公民館は、以後、更新を含めて11台にも及ぶ移動公民館が制作された特徴があった。こうした活動を分析したところ、同県の移動公民館は、公民館としての性格を有しつつも、図書館としての性格が強かったことがわかった。当初は、同県における文化会館設立の動きを背景に、兵庫県巡回文庫の充実に伴って成立した自動車の名所は、文化自動車であった。しかし、兵庫県巡回文庫がそのまま引き継がれたことを踏まえると、移動公民館は同文庫を積載する自動車であったと位置づけること

ができる。

- (2) 戦後初期におけるさまざまな移動図書館活動をはじめ、「移動図書館」や「自動車文庫」等の用語の定義と変遷について検討したところ、以下の点が明らかになった。

鹿児島県立図書館では、1949年5月に配本車による配本活動を開始した。これは同館がジープ型トラックを購入し、従来型の貸出文庫を運搬した。この活動については、「自動車文庫」と称されることもあり、高知県立図書館に次いで全国で2番目に自動車文庫（移動図書館）を開始したと指摘する文献も存在する。すなわち、そもそも同館における自動車文庫とは、貸出文庫の拡充を背景に、自動車で運搬される貸出文庫を指していたことがわかった。開架式書架を装備したブックモビルとしての自動車が同館に導入されても、自動車文庫の活動方法（貸出文庫の配本）はそのまま引き継がれた。同館で「移動図書館」と称される活動も存在したが、これは貸出文庫の一種であり、県立図書館の分館的性格を意味することが明らかになった。同館では、各郡への配本所設置を積極的にすすめ、県内全域に及ぶ配本網を確立し、地域住民への直接サービスは市町村が担うという姿勢を貫いていた。

岩手県立図書館では、1948年8月に移動図書館を開設したという記録がある。こうした活動を調査していくと、同館における戦後期の移動図書館とは、1930年代はじめの戦前期から継続していた貸出文庫や海浜図書館などの時限的な館外活動を引き継ぎつつ、「知性を涵養するスタジオが図書館」とであるという同館館長・鈴木彦次郎の理念が地域に運ばれていたことがわかった。鈴木は、同館を「地域の文化活動の基盤」とし、そのためには「動く図書館」の展開を考えていたことが背景にあった。同館の移動図書館とは、林間図書館、臨海図書館、炉端図書館を総称する名称であり、「移動文庫」とも総称されていたことがあった。

- (3) 戦後都市公民館発祥の地である八幡市（現・北九州市）を対象に、八幡市立図書館の「自動車文庫」、八幡製鉄所図書館の「自動車文庫」、八幡市民生部児童課の移動児童館車の活動の経緯や活動内容、利用状況、特徴等を実証的に考察した結果、以下の点が明らかになった。なお、本内容は、学会での口頭発表にて公表しており、今後、論文の形でまとめていく予定である。

八幡市立図書館における自動車文庫は、1952年8月に巡回を開始した。すでに1950年10月から同市ニュースカー（借り上げ自動車）を活用した巡回文庫を開始していた。当初は公民館活動を併せた活動を想定していたようであった。この自動車文庫は、小回りのきく600冊積載の小型トラック（外架装備）であり、市内を8コース、48ヶ所のステーション、2週間に1回の巡回を行っており、市内をきめ細かく巡回していたことが明らかになった。

八幡製鉄所図書館の自動車文庫は、1951年12月に巡回を開始した。この自動車文庫は、戸数の多い大規模な製鉄所社宅を中心に巡回したほか、製鉄所病院、本事務所、通用門への巡回も重ねていた。自動車は約4,000冊積載の大型自動車を改造したものであり、1週間に1回の巡回、60-90分の停車という定期的な巡回を重ねていた。利用は基本的に製鉄所の従業員であり、自動車文庫は製鉄所の福利厚生事業の一環として位置づけられていたことがわかった。

八幡市民生部児童課は、1952年6月より移動児童館車の巡回を開始した。すでにこれより前から同市の児童課の職員らがニュースカーを用いて子供会の会合や公園へ出かけ、幻灯や紙芝居、ゲームなどを行っていた。移動児童館車の完成後は、指定公園（21ヶ所）や、学校・保育所（36ヶ所）にて90-120分間に及ぶ活動をはじめ、「納涼子供会」も開催した記録があった。また、「八幡市子ども文庫の会」による児童図書配本の活動（1957年7月）にも、この移動児童館車が用いられ、図書館としての活動も内包していたことが明らかになった。

- (4) こうした戦後初期における移動図書館活動の理念や目的、活動方法をはじめ、かつての『市民の図書館』（日本図書館協会、1970）における移動図書館の記述内容、さらには「移動する図書館活動」に類似する移動博物館等の活動を踏まえながら、現在の公立図書館による移動図書館活動の課題と展望を検討した。その結果、図書館サービス計画に移動図書館をどのように位置づけているのか、移動図書館全国実態調査の必要性、メディアとしての自動車であると同時に、地域の「時計」になる自動車としての位置付けと視角、移動図書館のサービス（活動）や蔵書（コレクション）全体を踏まえながら、図書館が「移動」するという視点の重要性を明らかにした。

今後は、戦後初期から現代までの移動図書館活動の連続性と断絶性という視角から、現代の移動図書館活動の方法が定着した1970年代都市部の公共図書館を中心に、移動図書館活動の拡大と目的を実証的に分析することにより、戦後日本の移動図書館の成立を複眼的に検証していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石川敬史	4. 巻 70(5)
2. 論文標題 高知県立図書館における自動車文庫の成立	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書館界	6. 最初と最後の頁 572-584
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石川敬史	4. 巻 112
2. 論文標題 「移動図書館」というコトバを読む（移動図書館の足音，第8回）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 図書館車の窓	6. 最初と最後の頁 4-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石川敬史	4. 巻 36
2. 論文標題 戦後移動公民館の成立と展開：富山県と兵庫県を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書館文化史研究	6. 最初と最後の頁 127-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石川敬史	4. 巻 44(1)
2. 論文標題 移動図書館成立の序論的考察：1940年代後半から1950年代前半における活動名称を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 筑波大学教育学系論集	6. 最初と最後の頁 91-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石川敬史	4. 巻 510
2. 論文標題 地域の伴奏者としての移動図書館へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 みんなの図書館	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 移動図書館の歴史と課題，移動博物館の可能性
3. 学会等名 第3回全日本博物館学会博物館教育研究会例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 図書館活動の拡張に関する実証的検討：戦後八幡市における移動図書館と移動児童館を中心に
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 自動車で移動する社会教育活動の意義と課題：図書館，博物館，水族館を中心に
3. 学会等名 日本教育情報学会第34回年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 にぎやかな移動図書館
3. 学会等名 第17回小川町立図書館・図書館まつり（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 はたらく自動車の解読：移動図書館の可能性につなぐために
3. 学会等名 日本図書館研究会第343回例会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 移動公民館車の史的検討：移動する図書館活動の実証的考察を視野に
3. 学会等名 日本社会教育学会第64回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 （話題提供）どこへ何を運ぶ？：移動図書館と情報リテラシー
3. 学会等名 日本図書館協会，第22回利用教育委員会実践セミナー
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 移動図書館の世界へようこそ！
3. 学会等名 木つつ木バスフェスティバル，日本バス友の会主催（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 八幡市における図書館史：自動車文庫と移動児童館車の活動を中心に
3. 学会等名 日本図書館文化史研究会2019年度研究集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

うごく・はこぶ（連載エッセイ） http://www.yukensha.co.jp/contents/essay2/page/essay.html
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考